

第七劇場ツアー2021 チェーホフ原作「桜の園」をよりお楽しみいただくために

※ 内容には諸説ありますが、一つの見解としてお楽しみいただければ幸いです。

## ■ 登場人物

---

- ・ ラネーフスカヤ (○)・・・領地「桜の園」の所有者  
酒に溺れた夫と川に溺れた息子を相次いで亡くした後、  
家族を捨てパリの若い男のもとへ。  
しかしその男に捨てられ、5年ぶりに「桜の園」  
へ戻ってくるところから物語は始まる。
- ・ アーニャ(○)・・・ラネーフスカヤの娘
- ・ ワーリャ(○)・・・ラネーフスカヤの養女。アーニャの姉にあたる
- ・ ガーエフ・・・ラネーフスカヤの兄。  
妹と同様、領地管理の経営能力に乏しい。  
農民に対し理解を示すが、彼らを卑下する言動が散見する。
- ・ ロパーヒン・・・実業家  
父や祖父が昔ラネーフスカヤ家の農奴だった。
- ・ トロフィーモフ・・・大学生
- ・ ドゥニャーシャ(○)・・・ラネーフスカヤ家に使える小間使い
- ・ フィールス・・・年老いた従僕

※ (○) は女性

この物語は、19世紀後半のロシアにあるラネーフスカヤ夫人の領地での出来事である

## ■ 「桜の園」の時代のロシア

---

クリミア戦争に敗北したアレクサンドル 2 世は、その敗因の一つを領主が農奴を支配する農奴制にあると考え、皇帝が直接農民を徴兵できるよう 1861 年に農奴解放令を出した。

これにより、農奴は「農奴」という身分から解放され、土地も国が代金を肩代わりして、有償で分与されることになった。しかし、国は地主に地代を支払うに十分なお金をもっておらず、債券を発行しその資金にあてたが、地主は額面どおりのお金をもら  
(参考文献)

えることはなく、手にしたお金もこの物語の主人公ラネーフスカヤのように海外で浪費することが多かった。その結果当然のように経済的に困窮し、「桜の園」の領地のように土地を抵当に借金をすることは珍しくなかった。農民の中には、ロパーヒンのように自分のビジネスを立ち上げて成功したものもいたが、少数派だった。

このように当時のロシアは、従来の身分制度等が瓦解し、新しい社会に移行する過渡期にあった。

[1861 年 ロシアの農奴解放の実態：問題だらけでロシア革命の遠因に - ロシア・ビヨンド \(rbth.com\)](http://rbth.com)